

埋文にいかた

No. 48
2004. 9. 30

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

今年度発掘調査の紹介

かなや 金屋遺跡

(六日町大字余川字蟻子山35 - 1 ほか)



平安時代の竪穴住居

遺跡は県指定（昭和47年）史跡『ありごやまこぶんぐん蟻子山古墳群』が存在する蟻子山の南側丘陵裾部に位置しています。関越自動車道建設工事に係る範囲について、昭和57・58年に県教育委員会が記録保存のための発掘調査を行いました。今回の発掘調査は、関越自動車道の六日町雪氷Uターン路建設に先立つもので、工事に係る2,670㎡について4月～8月まで行いました。その結果、古墳時代と平安時代の遺構・遺物が見つかりました。

古墳時代の遺構はあまり存在しませんでしたが、浅い土坑からは小型の壺が出土しました。平安時代の遺構は掘立柱建物の一部と竪穴住居、土坑・ピット、溝・川跡などを検出しました。掘立柱建物

の大部分は、高速道に沿う側道で切り取られ、北辺側2間の柱穴はしらあなしか残存していませんでした。柱穴列に沿ってL字状の溝がありましたが、建物内への水の浸入を防ぐための施設と考えられます。竪穴住居は近接して2棟を検出しました。2棟とも石を骨格として構築したカマドを側辺に備えていました。住居内からは、須恵器えきの甕かめ、杯つきなどが出土しました。

(飯坂盛泰)



竪穴住居内の様子



カマドの様子

ご た ん だ 五反田遺跡

(中頸城郡板倉町大字米増字横田 226 ほか)

五反田遺跡は長野県と新潟県を結ぶ飯山トンネルの出口付近に位置し、すぐ脇にまで山が迫った緩斜面に立地しています。

北陸新幹線建設工事に先立ち、平成 15 年度から発掘調査を行っています。今年度は 4 月中旬～ 8 月上旬にかけて 2,030 m²を対象に調査を行いました。

調査の結果、掘立柱建物 4 棟以上、溝 3 条、土坑 15 基、柱穴等 600 基、川跡 2 本などが検出されました。最も遺構が集中する地点では、棟を東西に揃えた大型掘立柱建物群が存在し、何度か建て替えられていたことが分かりました。遺構のなかには、人頭大～拳大の焼けた石を詰め込んだ土坑や四角形に石を組んだものなど、今後に検討を残す希少なものも見つかりました。

遺物は 10 世紀～ 11 世紀初の土師器が大量に出土しました。内面を黒く磨き上げた椀が特徴的です。また、東海地方から運ばれてきた灰釉陶器・緑釉陶器も出土しています。最も注目すべきはガラス玉と和鏡です。前者は土坑から、後者は川底から出土しました。共に出土例の少ない遺物であり、遺跡の性格を考えるうえで重要な材料となりそうです。
(渡邊裕之)



五反田遺跡全景



焼礫が詰められた土坑



大量に出土した土器

ひるづか 昼塚遺跡

(北蒲原郡中条町大字大出字昼塚433 - 1 ほか)

昼塚遺跡は北蒲原郡中条町に所在する縄文時代晩期の遺跡です。日本海東北自動車道の建設事業に係り、今年度は交差する県道よりも北側の2,920㎡について調査しました。遺跡は胎内川扇状地の扇端部付近に立地し、厚さ30～50cmの水田耕作土を含む現表土層の下(標高7m前後)に広がっています。

遺構検出面の地盤は砂質シルト層ないし砂層で安定しています。しかし、地盤面の大半の部分がかつて行われた圃場整備等により削平されており、遺物包含層は一部に残存するのみでした。さらに遺物包含層中の炭化物の分布も希薄であり、地盤層の断面観察から生活面にできた凹凸のみならず、遺構の多くも削平の影響を受けている可能性が高いと考えられます。検出された遺構のほとんどは土坑で140基前後と予想され、県道のやや北側を東から西に下る流路跡の両側に集中している点が注目されます。土坑の中には切り合っているものがあるほか、流路跡に削られているものもいくつか検出されています。遺物は、土坑と同様に、流路跡でも堆積層下位で縄文晩期前葉から中葉の土器片が相当数出土したほか、クルミも多く出土しています。このように、土坑と流路跡との関連性も窺え、縄文晩期の土坑群を主とする遺跡での生活の様子を知る上で貴重な遺跡です。

(調査担当者 ㈱シン技術コンサル 折井 敦)



流路跡全景(東から)



流路跡遺物分布状況



土坑遺物出土状況

ろくとまき 六斗蒔遺跡

(北蒲原郡中条町大字築地字六斗蒔786 ほか)

六斗蒔遺跡は新潟県北部を流れる胎内川扇状地南西端の低地に位置しています。日本海東北自動車道の建設に係り、4月から10月までの予定で発掘調査を行っています。

調査の結果、約1,700年前の古墳時代前期の遺構と遺物が確認されました。当時の川に面した微高地からは、焼土や炭化物の集中する大小の焼き火跡が発見されました。これらの焼き火跡や樹木の近くからは、完形品を含む多数の土器が出土しています。壺や高杯の割合が比較的多いこと、赤色顔料やその材料が出土することなどが特徴といえます。いっぽう、住居の跡は今のところ検出されていません。本遺跡のすぐ南側に位置する反貫目遺跡の調査結果(H15年、日本海東北自動車道に係り埋文事業団が発掘調査)と類似した古墳時代前期の生活跡が確認されています。今後、こうした遺跡の歴史的 성격の検討が研究課題となりそうです。

(調査担当者 ㈱帆苺組 岡安光彦)



遺構精査状況



焼き火跡の調査状況



遺物出土状況

みちばた
道端遺跡
(荒川町大字南新保字道端97 ほか)

道端遺跡は胎内川扇状地の北東扇端部分に位置し、上下2枚の遺物包含層が存在する遺跡です。日本海東北自動車道建設に係り、記録保存を目的として平成14年・15年度に埋文事業団が調査した遺跡です。今年度は北側の範囲について、4月から発掘調査を開始しました。現在、上層の古墳前期の集落跡の調査を行っています。主な遺構としては、掘立柱建物、竪穴建物、土坑、円形状周溝（仮称）などが検出され、現在も



1号円形状周溝遺物出土状況

発掘作業中です。右の写真は1号円形状周溝の西側の遺物出土状況写真です。写真中央下部に見えているのが炉跡ですが、このように周溝の内側には、煮炊きの施設や上屋を支える柱穴なども検出されつつあり、この遺構の性格を考える上で重要な材料となりそうです。

左下の写真は樹皮の様な材が底面に敷かれた土坑で、貯蔵穴のような性格も考えられます。右下の写真は、掘立柱建物の柱材遺存状況です。この遺跡では、現在2棟の掘立柱建物を検出していますが、ほかにも柱材の遺存する柱穴が数基見つかっていることから、あと何棟が確認される可能性があります。

竪穴建物は10軒前後確認されていますが、まだ本格的な調査を行ってはいません。上層の調査が終り次第、下層（縄文時代）の調査を行います。
(調査担当者 国際航業株式会社 前川雅夫)



樹皮の様な材が敷かれた土坑



柱穴柱材遺存状況

報告書作成中の遺跡

滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群（滝寺：上越市大字滝寺字下達787ほか、大貫：上越市大字大貫字狼谷3248ほか）



3基並んだ窯跡（滝寺古窯跡群）



窯内部の様子（滝寺窯跡群）

古代の窯跡群は頸城平野西側に連なる丘陵裾部にあり、標高40～60mのいくつかの小さな沢の中に位置しています。合計11基の窯跡と、窯で焼かれ、破損などによって廃棄された須恵器が浅箱で800箱近く発見されました。この丘陵地域は、古窯跡群が多く確認されており、古代の工場地帯であったと考えられます。

窯は沢の急な斜面を溝状に掘りくぼめ、木の枝と粘土で天井を貼った半地下式の窖窯と呼ばれる構造をしていますが、天井はすべて崩れていました。大きさは全長6～10m、幅1～1.5m位で、床は30～40度の急傾斜を示します。沢の中は水はげが悪いため、足場板の設置や排水路を設けるなどの工夫をしていました。

焼成された須恵器は、水物を貯える大小の甕・横瓶・壺や、食器である杯や蓋が主に焼かれていました。その他、円面硯や金属器を模倣した鉢・壺などの仏具も見られ、役所や寺院などと強いつながりをもっていた可能性があります。滝寺・大貫古窯跡群の須恵器は上越市内の遺跡からも出土しており、報告書の刊行によって、これら消費地の須恵器との比較・検討が行えるようになることが期待されます。

（小田由美子）

下馬場遺跡（上越市大字下馬場字浦山836）

下馬場遺跡は上信越自動車道建設に先立ち平成9年4月～11月に発掘調査を行いました。遺跡は、高田平野の西部、南葉山からのびる標高72～79mの見晴らしの良い尾根上に位置します。調査の結果、弥生時代後期（約1900年前）の竪穴建物跡14軒、土坑など23基、縄文時代の陥穴状土坑16基が確認されました。遺物の大半は弥生時代の土器・石器ですが、旧石器、縄文早・前期の遺物も確認されました。立地の特徴から、戦乱などに備えて高台に砦を構えた高地性集落（防衛的集落）と考えられます。

竪穴建物跡は、その平面形で円・方・長方形の3つに分類できます。円形の建物跡（2軒）からは、赤色の石（鉄石英）を用いた管玉の製作遺物（原石や加工途中のもの）が特に多く出土しました。また、他の建物跡の中には（中心の炉以外に）床面の焼土を複数もつものがあること、金属を研磨した砥石などが出土することから、金属製品の加工（鍛冶作業）が行われていた可能性があります。県内のこの時期の遺跡では類例がない貴重な調査事例であるといえます。今後、出土遺物から竪穴建物間の相違を詳細に検討し、ほぼ同時期に存在した斐太遺跡群（新井市）、裏山遺跡（上越市）などとの比較検討を行っていきます。

（尾崎高宏）



遺跡の全景



竪穴建物（円形）

資料室の利用案内



埋文センター2階の資料室では、県内外の埋蔵文化財に関する図書を多数所蔵しています。閲覧を希望される方は、資料室までお申し出ください。

開室時間 : 平日(月曜日～金曜日) 8:30～17:00
閉室日 : 土・日・祝日・年末年始(12/29～1/3)

- 資料のコピー
実費負担にて資料のコピーを受付けています。
コピーを希望される方は、職員までお申し出下さい。
料金: 白黒コピー……1枚 10円
カラーコピー……1枚 40円



室町時代の市場のようす

学校との連携について



縄文時代のムラのようす

当事業団では、埋文センターでの学習に協力しています。また、要請により職員を派遣する出前授業も行っています。ご相談下さい。

- お問い合わせは
普及担当 佐藤までお願いします。



火おこしに使う道具
(まいきり)



●体験学習の例

- まいきり・手もみによる火おこし体験
- 黒曜石を使用した石器体験
- 横造縄文土器を使った煮炊き
- 土器作り・文様つけ
- など

埋文インフォメーション



埋文にいがた

「定期送付について」

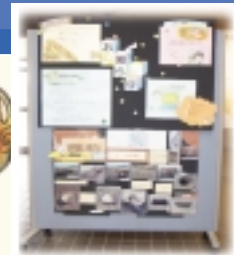
当事業団では、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくために、最新の発掘調査情報や、県内の史跡などを紹介する広報紙「埋文にいがた」を、年4回(6・9・12・3月)発行しています。定期送付をご希望の方は、下記の要領でお申し込み下さい。

- 申し込み方法
- ①埋文センター2階の資料室へご来室ください。
 - ②下記の係までお電話下さい。
☆受付時間: 平日(月曜日～金曜日) 8:30～17:00
※送料のみ、切手でいただきます(「埋文にいがた」の代金は、無料です)。

●申し込み先

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
「埋文にいがた定期送付受付」係
〒956-0845
新津市大字金津93-1
TEL: 0250-25-3981
FAX: 0250-25-3986

- ★「埋文にいがた」は、1階ロビーのテレビラックにあります。自由にご覧下さい。
- ★「埋文にいがた」は、ホームページからもダウンロードできます。



埋文センター展示室入口の情報コーナーです。来館の際はぜひご覧ください。

ホームページにアクセスしてね

<http://www.maibun.net>



★下記のメニューをご覧ください。

- What is 埋文事業団
- まいぶんちゃんの歴史教室
- 埋文事業団の刊行物
- おしらせ
- 発掘調査ガイド
- 発見! にいがたのむかし
- 広報紙「埋文にいがた」
- リンク集

埋文コラム「発掘から見えてきた農具の歴史」

日本人にとって、米は欠くことのできない食物です。米作りの技術は、弥生時代に海を越えて伝わったもので、二千数百年もの歴史があります。現在はほとんど機械化されている米作ですが、いにしえの人々ほどのような道具を使っていたのでしょうか。

農耕具

代表的なものは鍬と鋤です。刃先から柄まですべて木製のものが多かったのですが、鉄器の普及に伴い、鉄製の刃先が装着されるようになります。鉄器は稲作文化に伴って伝来したもので、弥生時代のはじめからあったのですが、非常に貴重なもので、数は少なかったのです。現在のように鍬先全体が金属製になるのは近代以降のようです。写真左は柏崎市箕輪遺跡から出土した鋤柄と鍬先です。鍬先の左右中ほどから少し形が細くなっていますが、この部分に山三賀遺跡から出土した写真のような鉄製の刃先を装着し、上方の四角い穴に柄を差し込みます。鋤・鍬とも平安時代のものと考えられます。

昔の水田は1年中水分の多い田んぼ（湿田）だったため、田下駄を履いて作業を行いました。田下駄には、方形の枠組みと梯子状の横木を持つものや円形の枠組みをもつもの、枠組みを持たない板状のものなどの種類があります。弥生時代の早い時期に、すでに様々な形のものがあったようです。写真は前述した箕輪遺跡から出土したもので、平安時代のものと考えられます。U字状の枠の中に足を入れ、縄などで固定したと思われる。裏には突起が4か所ついています。



鋤柄

鍬先

鋤・鍬の刃先

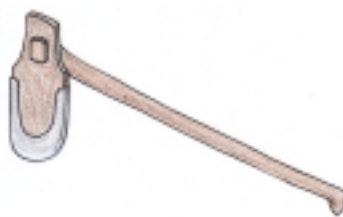
田下駄 表

裏

スケール 1 目盛 1 cm

収穫具

弥生時代はじめの頃はイラストにあるような石包丁いしほうちょうと呼ばれるものを使って稲穂を摘み取っていました。かまぼこのような形をしており、指を固定できるように紐穴が2つ開けられています。同様の形をした木包丁・貝包丁なども使われました。鉄器が普及してくると鉄製の穂摘み具や鎌が出現します。しかし、最古の鉄鎌は全長20cm以上もある大形品で、その用途は除草や伐採などであったと考えられており、収穫具としての鎌やまさんががあらわれるのは弥生時代後期頃のようにです。写真右は山三賀遺跡の古代の住居跡から出土した鉄鎌です。上は直刃、下は曲刃で、柄に装着するため端部が折り返されています。鍬や田下駄同様、基本的な形は二千年近く前から変わっていません。先人の知恵と技術には、驚くと同時に感心させられます。(坂上有紀)



石包丁の使用例



鉄鎌 *上：長さ18cm

参考文献 第2回 東海考古フォーラム「古代における農具の変遷 - 稲作技術史を農具から見る - 」

静岡県埋蔵文化財調査研究所

県内の遺跡・遺物 46

樽口遺跡出土品一括 (平成15年 県指定)

遺物出土地：岩船郡朝日村大字三面字樽口向 145 番地ほか

樽口遺跡は県営奥三面ダム建設に先立ち、平成4年～6年にかけて発掘調査されました。水没範囲には、奥三面遺跡群と総称される19遺跡が存在しました。(奥三面遺跡群は、村教委により昭和63年から平成10年まで発掘調査されました。)

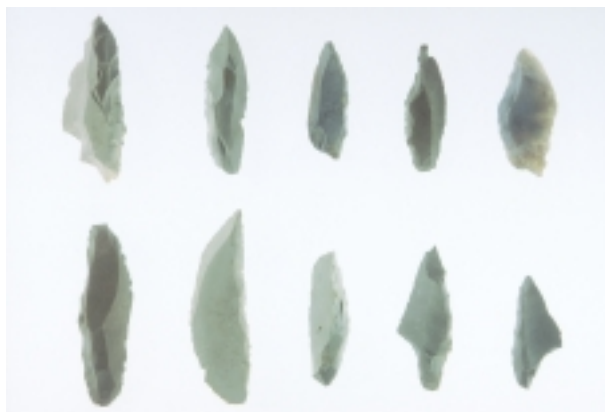
遺跡は三面川とその支流である末沢川の合流地点南側、樽山(標高621m)の北西山麓に形成された河岸段丘上に位置しています。奥三面遺跡群では最も古い遺跡で、旧石器時代から縄文時代初めにかけて人々が繰り返し利用した場所です。

指定された出土品は、出土遺物約15,000点の内、縄文時代草創期の石器6点、後期旧石器時代の石器2,994点、計3,000点を数えます。

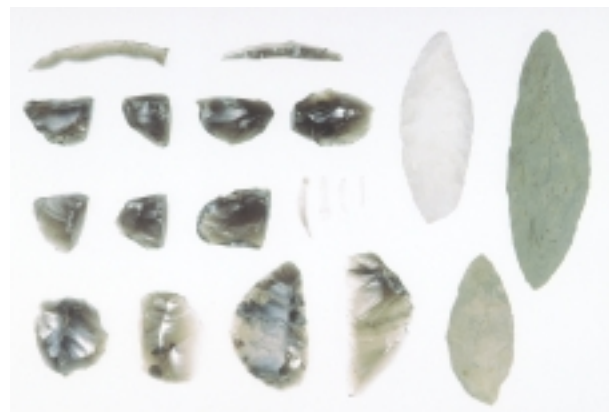
後期旧石器時代の石器は、南九州を起源とする火山灰(AT:約25,000年～20,000年前)の上下から出土していることが確認され、火山灰層を年代の指標として石器の時期差や型式差を考察できる重要な資料といえます。さらに、細石刃に使用された黒曜石は秋田県男鹿産が多用されていること、より古いナイフ形石器文化期には青森県深浦産、長野県和田峠産の黒曜石が使用されていることから、旧石器時代の人々の行動域を考察する上で重要な資料となります。このようなことから樽口遺跡の旧石器時代の石器は中部地方北部の基準資料となる貴重な出土品といえます。



遺跡遠景

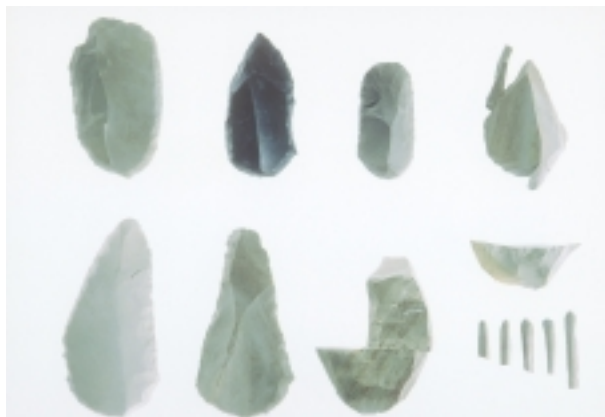


ナイフ形石器ほか (約20,000年前)



細石刃石核ほか (左は黒曜石製) (約15,000年前)

(撮影 小川忠博)



細石刃石器群 (約15,000年前)

埋文にいがたNo. 48
 発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新津市金津93番地 1
 TEL (0250) 25-3981
 FAX (0250) 25-3986
 e-mail: niigata@maibun.net
 URL: http://www.maibun.net
 印刷 新高速印刷(株)